

2001年7月1日

## 神の箱

【聖書】サムエル記上 6章1節～7章1節 ◆神の箱の帰還

6:1 主の箱は、七か月の間ペリシテの地にあった。 6:2 ペリシテ人は、祭司たちと占い師たちを呼んで尋ねた。「主の箱をどうしたものでしょう。どのようにしてあれを元の所に送り返したらよいのか、教えてください。」 6:3 彼らは答えた。「イスラエルの神の箱を送り返すにあたっては、何も添えずに送ってはならない。必ず賠償の献げ物と共に返さなければならない。そうすれば、あなたたちはいやされ、神の手があなたたちを離れなかった理由も理解できよう。」 6:4 ペリシテ人は言った。「それでは、返すにあたって、賠償の献げ物は何がよいのでしょうか。」 彼らは答えた。「同一の災厄があなたたち全員とあなたたちの領主にくだったのだから、ペリシテの領主の数に合わせて、五つの金のはれ物と五つの金のねずみにしなさい。 6:5 はれ物の模型と大地を荒らすねずみの模型を造って、イスラエルの神に栄光を帰すならば、恐らくイスラエルの神は、あなたたち、あなたたちの神々、そしてあなたたちの土地の上のしかかっているその手を軽くされるだろう。 6:6 なぜ、あなたたちは、エジプト人とファラオがその心を固くしたように、心を固くするのか。神が彼らを悩ませたので、彼らはイスラエル人を行かせざるをえなくなり、イスラエル人は去って行ったではないか。 6:7 今、新しい車一両と、まだ軛をつけたことのない、乳を飲ませている雌牛二頭を用意しなさい。雌牛を車につなぎ、子牛は引き離して小屋に戻しなさい。 6:8 主の箱を車に載せ、賠償の献げ物として主に返す金の品物を箱に入れ、傍らに置きなさい。それを送り出し、行くがままにしなさい。 6:9 そして見ていて、それが自分の国に向かう道を、ベト・シメシュへ上って行くならば、我々に対してこの大きな災難を起こしたのは彼らの神だ。もし、その方向に上って行かなければ、彼らの神の手が我々を打ったのではなく、偶然の災難だったのだということが分かる。」

6:10 人々はそのとおりに行った。乳を飲ませている二頭の雌牛を連れて来て車につなぎ、子牛を小屋に閉じ込めた。 6:11 主の箱を車に載せ、金で造ったねずみとはれ物の模型を入れた箱も載せた。 6:12 雌牛は、ベト・シメシュに通じる一筋の広い道をまっすぐに進んで行った。歩きながら鳴いたが、右にも左にもそれなかった。ペリシテの領主たちは、ベト・シメシュの国境まで後をつけて行った。 6:13 ベト・シメシュの人々は谷あいの平野で小麦を刈り入れていたが、目を上げると主の箱が見えた。彼らはそれを見て喜んだ。 6:14 車はベト・シメシュの人ヨシュアの畑に着くと、そこに止まった。そこには大きな石があったので、人々は車に使われた木材を割り、雌牛を焼き尽くす献げ物として主にささげた。

6:15 レビ人たちは主の箱と、その脇に置いてあった金の品物の入った箱とを下ろし、大きな石の上に置いた。その日ベト・シメシュの人々は、焼き尽くす献げ物や、他のいけにえを主にささげた。 6:16 ペリシテの五人の領主はこれを見届けると、その日のうちにエクロンへ戻った。 6:17 ペリシテ人が、主に賠償の献げ物として送った金のはれ物は、アシュドドのために一つ、ガザのために一つ、アシュケロンのために一つ、ガトのために一つ、エクロンのために一つである。 6:18 金のねずみの数は、ペリシテの砦の町から田舎の村まで、五人の領主に属するペリシテ人のすべての町の数に合っていた。主の箱が置かれた大きな石は、今日でも、ベト・シメシュの人ヨシュアの畑にある。

6:19 主はベト・シメシュの人々を打たれた。主の箱の中をのぞいたからである。主は五万のうち七十人の民を打たれた。主が民に大きな打撃を与えられたので、民は喪に服した。 6:20 ベト・シメシュの人々は言った。「この聖なる神、主の御前に誰が立つことができようか。我々のもとから誰のもとへ行っていただくか。」

6:21 彼らはキルヤト・エアリムの住民に使者を送って言った。「ペリシテ人が主の箱を返してきました。下って来て、主の箱をあなたがたのもとに担ぎ上げてください。」 7:1 キルヤト・エアリムの人々はやって来て、主の箱を担ぎ上り、丘の上のアビナダブの家に運び入れた。そして、アビナダブの息子エルアザルを聖別して、主の箱を守らせた。

## [序] 三種の神器

先週は、エリとその家族の上にとつた厳しい神の裁きについて学びました。ペリシテとの決戦に敗れて、98才のエリと彼の後を継いで祭司になっていた二人の息子と妻が一举に死にました。そればかりでなく、戦争に勝とうとして前線に担ぎ出した神の箱が敵に奪われ、シロの神殿が破壊されてしまいました。

これはイスラエルの人々にとって大敗北でした。日本にたとえれば天皇と皇太子一族が死に、伊勢神宮が破壊されて三種の神器が奪われる敗北に当たると申しましたら、三種の神器とは何かという質問がありました。

これは天皇が皇位のしるしとして代代にわたって受け継いできた宝です。やたの鏡は伊勢神宮の内宮に、天のむらくもの剣は名古屋の熱田神宮に、それぞれご神体として祀られています。やさかにの曲玉(まがたま)は東京の宮城の内に保管されています。天皇が即位する時にはこの三種の神器を集めて即位式に臨みます。私たちの年代は小学生の時に国史、修身で学びました。この伝統は天皇制と共に今でも生きているのですから、若い皆さんも知っていた方が良いでしょうとお話しました。

さてペリシテに奪われた神の箱は、それからどうなったのでしょうか。今日はそれが主題です。

## [1] 神の箱に打たれた人々

ペリシテ人はイスラエルの神を分捕ったと大喜びして、自分たちの守護神ダゴンに仕えさせるために、神の箱をアシュドの神殿に運びました。ところがダゴンの像の方が、神の箱の前に倒れ伏して壊れてしまいました。その上、アシュドと周辺の人々が**大勢、腫れ物を患って苦しみました**。

そこで人々は「神の手が我々と我々の神ダゴンの上に**災難をもたらした**」と言って、神の箱をガドに移しました。するとガドの人々の間にも腫れ物が広がりました。そこで神の箱はエクロンに送られました。エクロンでは人々が「**我々を殺す気か**」と叫んで、大騒ぎになりました。

こうして神の箱は、七ヶ月の間にペリシテの五人の領主がそれぞれに住んでいる五つの町をたらい回しにされながら、腫れ物によってペリシテ中を死の恐怖に包んでしまいました。そこで人々は神の箱を送り返すことにしました。祭司や占い師の意見に従い、後に災いが残らないようにするため、五つの町の数に合わせて、五の金の腫れ物と五の金のねずみを賠償金として箱に添えることにしました。ねずみと腫れ物の組み合わせから考えて、ねずみによって伝染する腺ペストではなかったかと言われています。人々は子牛にまだ乳を与えている二頭の牝牛に、神の箱を載せた車をひかせてイスラエルに返すことにしました。子牛から引き離された母牛は、子牛のもとに回れ右をして戻ってくるのが普通です。ところが二頭の母牛は鳴きながらも道を真っ直ぐに歩き続けて、国境を越えベト・シメシュにたどり着いたのです。ペリシテの領主たちは車の後をつけていき、やはり神さまの力強い御手が働いていたのだと納得して、引き返していきました。

ベト・シエメシュの人々は、神の箱が帰ってきたので大喜びして、車を壊して薪にし、二頭の牝牛を焼き尽くす献げものにして礼拝を捧げました。しかしそこでも住民70人が死ぬという事件が発生しました。この人たちが好奇心にかられて、ふたを開けて箱の中を覗いてしまったのです。人々は震え上がり、キルヤト・エアリムに神の箱を引き取ってもらいました。キルヤト・エアリムの住民は、箱を丘の上のアビナダブの家に運び入れ、息子のエルアザルを聖別して、神の箱を守らせることにしました。

イスラエルの大軍が大敗北をしたのに、捕らわれていった神の箱は、彼らの守護神ダゴンの像を打ち倒し、七ヶ月の間に、腫れ物の災害で領主五人の町の全てを、死の恐怖で包んでしまいました。ペリシテの人々は、賠償金を添えて神の箱にお引取り願いました。これはイスラエルの神がひとり、ペリシテに勝利をおさめられたと言うことなのではないでしょうか。

いいえ、神の箱によって打たれたのは、イスラエルも同じです。戦争に担ぎ出して負けてしまい、祭司のエリと息子たちを失いました。また七ヶ月後ベト・シエメシュに戻ってきた時にも、70人が打たれて死んでいます。神の箱に打たれたのは、ペリシテもイスラエルも同じなのです。これは何を意味しているのでしょうか。

## [2] テルテル坊主の歌

ペリシテ人たちはいみじくも「神の手は我々と我々の神ダゴンの上に災難をもたらす」と言いました。箱に魔力があるのではなくて、神さまご自身が力をふるって、神の支配をお進めになります。その神さまを自分の思い通りに扱おうとするのは、人間の高ぶりです。その傲慢さが厳しい裁きを受けるのです。そしてこの高ぶりは、ペリシテ人やイスラエル人だけでなく、私たち皆が持っているのではないのでしょうか。

エリは少年サムエルに「主よお話ください。僕(しもべ)は聞いております」という言葉を教えました。神さまがお語りになる御言葉を良く聞こうとする私は、神さまの僕になっています。それとは逆に神さまにあれこれ指示命令して自分の思い通りに働かせようとする私は、自分が主人になり、神さまを自分の僕にしています。そしてこのような逆転した神と人間との関係がこの世ではいかに多いことでしょうか。

子どもの頃、運動会や遠足などの前の日には雨降りが心配で、よく空を見上げたものでした。テルテル坊主を作って窓の外にぶら下げて、よくこの童謡を歌ったものでした。

- |               |               |                |
|---------------|---------------|----------------|
| (1)テルテル坊主テル坊主 | (2)テルテル坊主テル坊主 | (3)テルテル坊主テルぼうず |
| あした天気にしておくれ   | あした天気にしておくれ   | あした天気にしておくれ    |
| いつかの夢の空のように   | わたしの願いを聞いたなら  | それでも曇って泣いてたら   |
| 晴れたら金の鈴あげよう   | 甘いお酒をたんと飲ましょ  | そなたの首をチョンと切るぞ  |

「晴れたら金の鈴あげよう」——きれいな着物を着てチリンチリンと鳴る金の鈴を帯につけていたい——これは女の子の夢なのでしょう。「甘いお酒をたんと飲ましょ」——お祭りにいただく甘酒のとろけるようなおいしさが、いつまでも男の子の喉に残っています。でもこんなにもお願いしても雨が降ったら「そなたの首をチョンと切るぞ」——可愛らしく表現されていますが、これはいけません。

願いごとを聞いてくれる対象をつくり、お礼をするからかなえてほしいと手を合わせて懇願することが、信心の温床だといわれています。しかし宗教が人々の願いごとをかなえる手段として形成されていきますと、これは大変問題だと私は思います。なぜなら懸命に信心しても願いごとをかなえてくれない神を、この歌のように首を切ってお払い箱にするからです。これでは神さまは人間の願いをかなえる召使に過ぎなくなります。

ギリシャの哲学者エピクロスは言いました。「その人を幸福にしたいのなら、その人の欲望を取り除いてあげなさい」。自分の欲望をかなえてくれる神を選び、だめならその神を捨てるというのでは、私たちの欲深さはいつまでもそのままです。それでは、私たちは本当に幸福にはなれません。

聖書では「信仰」を「信頼、誠実、忠誠」という意味を持つ語で表します。「信仰」とはそのような人格を私たちの内に創りあげていくものだからです。そして私たちは他の人々と真実の交わりをもって生きていくことが出来ます。このような人格は、私たちが神さまの僕(しもべ)となり、神さまのみこころに聞き従う時にのみ形つくられていくのです。

神さまを自分勝手に扱わない。深い畏れをもってお仕えしていく。これは信仰の基本姿勢でなければなりません。神の箱をめぐるイスラエルとペリシテの人々の騒動は神さまの私たちに対する厳しい警告です。

### [3] 日時計にこめられた祈り

ペリシテの人々は、神の箱を厄病神扱いして五つの町をたらい回しにしました。エクロンの住民は「我々を殺すつもりか」と喚きました。神の箱は、トランプのばば抜きジョーカーのように嫌われました。そして賠償金つきで返されました。

ベト・シエメシュの人たちも、大喜びして帰ってきた神の箱を迎えましたが、70人が死ぬと震え上がって、ギルヤト・エアリムに引き取ってもらっています。神の箱の中には律法の記された石の板が納められていました。律法とは神さまがイスラエルの神になってくださったという契約書です。「神さまは私たちの神として一緒にいて守り導いてくださる」。それがどうして恐ろしいこと、嫌なことなのでしょう。嬉しいことではありませんか。だからイスラエルの人々は神の箱と共に荒野を通り、約束の地カナンに移り住んだのでした。

ハンセン病に対する国の態度が間違っていたことを国が認めて謝罪し、患者さんがたの名誉を

回復することに国を挙げて取り組むことになりました。日本で一番最初の施設はイギリス人のハンナ・リデル先生が建てた、熊本の回春病院です。礼拝堂の前に日時計が置かれ、詩篇113:3の聖句が日時計の周りを囲んでいたそうです。「日の昇るところから日の沈むところまで 主の御名が賛美されるように」。

患者さんたちが深い苦悩を抱きつつも、天日と共に生き、天日と共に眠ってほしい。日時計が役に立たない曇りや雨の日は、生涯から取り除かれますように。暖かい光に十分ぬくもって、落日の栄えのうちに父なる神の懐に迎えられるように——これが日時計にこめられた、リデル先生の祈りだったそうです。

神さまを賛美する喜びは、どこか地の一部分にだけあるのではなくて、東の果てから西の果てまで世界の全部に満ちている。それは全地が、賛美を呼び起こす神の恵みの中にあるからです。家族から引き裂かれ、社会の冷たい偏見の中で生きなければならなかった人たちの心は、嘆きと呪いに満ちた地のようなことでしょう。でもリデル先生は、この回春病院も神さまの恵みの手の中にあり、賛美の喜びが湧いてくる地だと確信していたのです。

今日の聖書の個所には、ペリシテの町々にもベト・シエメシュにも、せつかく神の箱を迎えながら、この感謝と賛美が見られません。神さまが恵みと救いをもって支配してくださっているという信仰がないからです。これは神さまに対する信仰が間違っているからにほかなりません。神さまが主であり、自分たちは僕であるという恐れがないからです。

イエス・キリストは「アッバ父よ、あなたは何でもおできになります。十字架の死という杯を取り除けてください。しかし私の願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と祈られました。神さまの御心を優先にしてくださいという祈りです。

私たちの祈りは何が何でも自分の願いをかなえてくださいと、私中心です。しかし私の願い通りになることが、私にとって一番よいことなのでしょうか。欲深く罪深い私の思いよりも、全能者である愛の父の意思決定こそ最高最善だという信頼感がある時、神さまを喜び感謝して、賛美が湧き上がってくるのです。だから神さまは「わたしを主として崇めなさい。わたしに聞き従いなさい。そしてわたしから恵みと祝福を受けなさい」とおっしゃるのです。

## [結] 喜び 賛美しつつ

モーセは聖なる神さまへの恐れをもって神の箱を運ぶやり方をきちんと教えています。「彼らが神聖なものに近づくとき、死ぬことなく命を保つために、彼らのためにこうしなさい」(民数記4章)。ベト・シエメシュの人たちは焼き尽くす献げ物をもって礼拝して神の箱を迎えました。しかし好奇心にかられて箱の中をのぞいて死を招きました。聖書をきちんと読んでいなかったからです。

神さまの思いは、私たち全ての者が滅びないで、豊かな命の祝福にあずかることです。神さまの

お言葉をきちんと聞き、僕としてそのお言葉通りに従いましょう。自分勝手な聞き方で、自分のしたいようにするのは、僕ではありません。祝福はいただけません。

聖書を読みながら、神さまの導きを求めましょう。務めて礼拝を守り続けましょう。どんな時でも、どのような所ででも、神さまを身近に覚えて感謝し、喜び、賛美の歌を歌いつつ、進んで行きましょう。

完